

11. 腎癌の非癌部における steroid sulfatase の発現について
—組織化学および in situ hybridization による検討—
西川 恵・中沢俱子・相川英三 (解剖学・発生生物学)
西村英樹・東間 紘 (腎臓総合医療センター)
12. Renal sarcoma
白柳慶之・鬼塚史朗・伊藤文夫・前田佳子・
大島 直・木原 健・中沢速和・東間 紘 (泌尿器科)
13. 腎糸球体内マクロファージ浸潤からみた小児期紫斑病性腎炎の検討
木ノ上啓子・服部元史・松永 明・川口 洋・
伊藤克己 (腎センター小児科)
堀田 茂・中山英吾・川島真由子 (腎センター病理検査室)
14. IgA 腎症における糸球体内 PDGF 受容体発現とステロイド治療の関係
内藤 隆・大図弘之・新田孝作・湯村和子・二瓶 宏 (第四内科)
- 座長 久保長生 (脳神経外科)
15. Dysembryoplastic neuroepithelial tumor (DNT) とその類似疾患について
久保長生・嶋田幸恵・田鹿安彦・日山博文・高倉公朋 (脳神経外科)
16. 福山型先天性筋ジストロフィーの胎児剖検例：胎齢20週における大脳病変
山本智子・小森隆司・柴田亮行・豊田智里・小林慎雄 (第一病理)
近藤恵理・斉藤加代子・大澤真木子 (小児科)
17. 筋萎縮性側索硬化症の脊髓前角におけるシナプスの変化について
佐々木彰一・谷田部可奈・近藤裕美・堀場 恵・
岩田 誠 (神経内科)
西川俊郎 (第二病理学)

閉会の辞

1. 胃壁下に懸垂した epitheloid leiomyoma (leiomyoblastoma) の1例

(第二病理) 石山 茂・池田郁雄・
西川俊郎・笠島 武

症例は82歳の男性で、胆石・胆嚢炎のため手術目的で入院した。胆摘術中に胃体下部前壁大弯寄りに胃壁外性、有茎性に発育した腫瘤 (大きさ3.5×4.5×1.5 cm, 重量20g) を発見し切除術を施行した。組織学的には腫瘤には類円形ないし多角形の腫瘍細胞の充実性で上皮様配列を示す増殖がみられ、一部に紡錘型の腫瘍細胞も認められた。核分裂の頻度は低く (mitotic index 2-3)、低悪性度な epitheloid leiomyoblastoma と考えられた。免疫組織学的には vimentin, myoglobin が陽性で、 α -smooth muscle actin, desmin, S-100タンパクは陰性であった。これらの所見は通常の平滑筋腫と形態と性状が異なるもので細胞起源に論議が多い。平滑筋細胞の aberrant な分化にするとする Enzinger らの説を否定しえない。また、この腫瘍では臨床症状は潜在しかつ内視鏡的にも見出せないことが多いことがあり、また、再発することがある。

2. C型慢性肝炎における細胞接着分子の発現に関する免疫組織学的検討

(消化器内科) 谷合麻紀子・橋本悦子・
青鹿圭子・石黒典子・林 直諒

〔目的〕細胞接着分子の C 型慢性肝炎肝組織内での発現について免疫組織学的手法を用いて検討した。

〔対象と方法〕IFN 治療を施行した C 型慢性肝炎で、治療前45例、治療後20例 (IFN 治療効果：著効9例、有効6例、無効5例) から針生検にて得られた肝組織を無固定凍結、薄切後アセトン固定し、intercellular adhesion molecule (ICAM)-1, lymphocyte-function associated antigen (LFA)-1, CD44 に対するマウスモノクローナル抗体を一次抗体として酵素抗体間接法にて免疫染色を行った。

〔結果〕IFN 治療前、ICAM-1は主に壊死・炎症部位の肝細胞膜上に、LFA-1は浸潤リンパ球に、CD44は浸潤リンパ球と Kupffer 細胞に発現を認めた。IFN 治療後、著効群ではこれらの発現は著明に減弱し、無効群では変化を認めない例が多かった。

3. 幼若巨核芽球の出現を主体とし MDS 様所見を